
キイトン国の、とある物語

リノさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キイトン国の、とある物語

【Nコード】

N3975X

【作者名】

リノさん

【あらすじ】

銀髪のツインテールの美少女・シャステイスは、子爵家というお気楽な身分を楽しんでいた。シスコンだが唯一の兄と、今日もお馬鹿な攻防戦。

「シャスるー！」「黙れ」「ねえシャスるー！」「変態黙れ」▼

▼▼兄のせいでシャステイスは男口調です。精神的BLなので苦手な方はご注意ください。▼▼この作品は暇つぶしで作っています。不定期更新ですので、ご注意ください。

1：ティータイムから始まる日常

シャステイスは、この時間がとても好きであった。

お気に入りの紅茶を口に含み、外では小鳥のさえずりが聞こえている。

子爵家という身分は実にいいもので、自由気ままに毎日を過ごしていた。

だが、またあの嵐の火種がやってくる。

「シャスるー！」

……兄だ……。

幼い顔立ちを残した鳶色の髪。それと同じ色をした若干垂れ気味の瞳が印象的だ。

走りやすそうな……じゃなくて、動きやすそうな服装だ。外行きの外套がこっちまでかかる。

「寂しかったよね。よくお留守番できました、よしよし」

「……………やめろ」

「ん？ なに？」

「やめろって言うてんのがわかんないのかこの馬鹿兄様！」

ふるふると豊かな銀色の髪が踊る。

シャステイスにとってこの髪は自慢だった。だったのだ。

シスコン野郎
この兄のせいで、嫌いになった。

「気持ち悪いから離れる馬鹿っ！！」

「なんで？ それにさ、シャスるー何で男口調になるかな。女の子になって？」

「い・や・だ・っ・！！」

自分のことを「シャスるー」と言うほど、この馬鹿はシスコンなのだ。

だからシャステイスは、昔から男口調なのだ。

「蹴るぞ馬鹿っ！ 殴る」

「あ、あれ？ シヤスるーどうしたの？ いきなり離れてどこ行くの？ あ、それなに？ あはははは。まさか可愛い妹が唯一の兄を花瓶で殴らないよね？」

自分でも怖いと思うほど、シヤステイスは不敵な笑みを貼り付ける。

「殴る」

たった一言。

「あああああああ！」

兄の悲鳴が、その部屋の中を木霊した。

▼
▼
▼

「ひどいよシャスるー。僕は、僕は、一生懸命妹を慰めようと……」

「慰めなくていいわい！」

目に一滴の涙を浮かべて三角座りする兄を見下ろし、シャスティスは自身のツインテールの銀髪を舞わせながら言う。

「いいか兄様。今度抱きついてでもしてきたら、みぞおちに入れるっ」

「ひー。シャスるー怖いー」

「ふん。自業自得じゃい——」

「——へえ銀かぁー。でもその口調じゃ男は寄らないちゅうね」

「っ!？」

幽霊人発見！

シャスティスの後ろからひょっこり出てきたのは、おかっぱ頭で

両目が前髪に潰された黒尽くめの男。

しかし、……なぜにおかつば頭！？

にやりと、やたら口端の上がった唇が、黒尽くめの印象だ。

「お前、どこから出てきた？」

シャスティスは驚きを隠せない。

「外から侵入したんやけど」

「……出てけ」

「いいやんか別にー」

黒尽くめのおかつば男の次に、さっきまで体育座りしていた兄が盛大に反応する。

「えええええ！？ シャスるー、きみはこんなヤツと密会していたのかい！？」

「おおおおおいつ！ いったいどうやればそうなるんだっ」

「今からすんの？」

「やめろ馬鹿っ！」

しっし、シャステイスがと手で払いのけると、おかっぱ黒尽くめはシニカルな笑みをうかべた。

「だいジヨブだいジヨブ」

とすると、兄が何故か後ろから抱きついてきて。

「シャスるーは僕のものだよ」

「ひゃ」

「あれ、可愛い声」

「う、うつつるさいっ！」

兄の手が、身体全体を這っていくのが感じられた。

「やめろ！ やるんだったら他のやつでやれっ！」

「……駄目。女の子の声で言って」

「はあ？ な、なんだその声は？！ 気持ち悪いぞっ！」

艶数倍増した声だ。いつも兄なら、悪ふざけだけで終わるはずなのに。

「……俺、邪魔者やん？」

「ああ。邪魔者だ」

「いや駄目だ！ ここにいてくれ！ そしてこの馬鹿を止めてくれ！」

銀髪が舞い、自分でもわかるほど目が潤んでる。

「——嫌」

即答。

「なっ。嫌だとは何だ！ 勝手に人の家に上がりこんで！ お前いたたい、何者だっ」

シャステイスが叫ぶと、おかっぱ男は口もとに優雅な笑みをうか

べる。

「ただの傍観者やん。俺はアイトウ・セイジ、ちゅうもんや。薬をあんたの親父さんに買ってもらおう思て来たんや」

「薬師か？ しかも、なんだその喋り方？」

「ちやうちやう。俺は薬師じゃなくて、ただ届けに来ただけや。この独特なじゃべりかたは、俺の住んでた地方のせいや」

へえ、とそのまま話に流されそうだったシャスティスは、ふと気付く。

「って、この馬鹿兄様はいつたいなにしとんじゃ——っ！
」！

「もうちよつと可愛い声でお願い」

「嫌じゃこの変態野郎っ！！」

尻を触るわ腰を触るや、兄の根性は腐っている。

「じゃあ。僕が可愛くしてあげる」

「ひ……！？」

後ろから兄の手が、スカートをどかして太ももを撫でる。

おかっぱ男は、なぜかその部屋から出て行った。

……どこ行くんだよ！

「うーん。やっぱベット行く？」

「黙れこん畜生！」

「せめて男口調は治そう」

「無理じゃボケ！」

「ぎゃーん」

ぎゃーんって何だ！？

「じゃあじゃあ、今からお散歩しよ？ うん。それがいい！」

「勝手に決めんな！」

しかし兄は、目をきらりーんと輝かせ、シャスティスの腕を引っ

張った。

「美味しいご飯を食べて、街を見て回ろう！」

まったく、兄の猫のような性格は聞いて呆れる。

兄はたまに帰ってくる。そしていつも通り自分に抱きついてくる。

そして、色々やってまたどこかへ行ってしまう。

……私の、ただ一人の兄様……。

思わず笑みがこぼれてしまうのを、彼女は知らない。

ただ、兄の笑顔だけが、まぶしいばかりに輝いていた。

▼ ▼ ▼

……し、しまった！ つい兄様の言動にのせられてしまった！

シャステイスはツインテールの銀髪をふるふると舞わせ、明るい街を見渡した。

しっかり兄と手で繋がれている。

だから、もう逃げられない。

「シャスるー、何食べるう？ 口移しだったら何でも言ってね」

「街中で、しかも耳元で、エロボイスでしゃべるなこの馬鹿っ！」

「…違う女の子は好評だったのに…」

「セクハラしときながら落ち込むなっ！」

兄として、こう、もっと威厳を持つてほしいものだ。

顔立ちはけっこう整っているのだ。この性格じゃなければ妹として自慢できるのに。

「ねえシャスるー、なに食べるー？ そうだ、パフェにしよう！」

「ぱ、パフェ？ パフェってなんだ？」

「え？ シャスるーホンとに女の子？」

「わ、悪かったな流行に疎^{うと}くて！」

シャスティスは顔を真っ赤にしながらも、むすつとして問う。

「美味しいよ。甘くてとろけそうなほどに」

「そ、それが食べたい……………」

「？ もう一回言って？」

街中で顔近づけるな。たぶん自分の顔は真っ赤だろう。

「そ、それが食べたい……………です……………」

シャスティスの頭から湯気が立ち上りそうだ。

兄はニコリと笑むと「いいよ」と、パフェ屋にスキップしそうな足取りで駆けて行った。

……………は、恥ずかしすぎる……………！

パフェとやらは知らないが、甘いものといえば女子が好物なも

のだ。

シャスティスは男口調に慣れ過ぎて、女子が食べそうなものすべて却下していた。

スカートは兄に着せられているが、甘いお菓子を食べるのはいったい何年ぶりだろう。

「ほら、あーん」

「あー？　——　っはむっ！？？」

促されるままに口を開いてしまったシャスティスは、兄の顔を呆然と見入った。

「この可愛い顔を、部屋の中で堪能したいなあ」

舌なめずりをする兄の顔が、やたら近い。

口の中にある、甘み成分は、パフェとかいうお菓子だろう。

「よし。今から家に帰ろう！」

ふつぶつと、シャスティスの中で何かが湧き上がる。

1：ティータイムから始まる日常（後書き）

次はいつになるでしょうか……。

2：クッキーの香りとともに

……せっかくズボンに履き替えようと思ったのに、あのバカ兄様のせいで！

スカートを脱ぐどころか、なぜか全身真っ黒のゴスロリ服を着せられてしまった。

自慢の銀髪ツインテールを震わせながら、シャスティスは一人文句を言い続ける。

「あああ、ほんとうに嫌だ。なんで私が、バカ兄様のためにお菓子を作らなければなんないんだ」

オーブンでこんがりと焼けば、ほらクッキーの出来上がり。

暑い鉄板に触れないよう気をつけながら、それを取り出す。うん、良い匂い。我ながら百点満点だ。

シャスティスはさつさと寒い厨房から出て、昨日紅茶を楽しんでいたテラスへ走った。

この屋敷は広くもないし、狭くもない。使用人が居ないので、

周りのことは自分でやるのが決まりだ。

「すごいだろ兄様！　これが私の自信作っ——あれ……」

白いテーブルと白い椅子。そこにはそれしかない。幼い顔立ちとともにある鳶色の髪と、そこにある笑顔が、ない。

……兄様、いったいどこ行っただ？

「——あつ、超良い匂いがする。クッキーかな」

青年と思われる人物は、自信作であるクッキーを一つつまんで口の中に放り投げた。

ぼりぼりゴクン、と一通りの音が傍で聞こえる。

「うーん。ちょっと甘すぎかなあ。でも俺は、けっこう好きやけど」

「……まだ出たな……おかっぱ頭……！」

くるりと振り向くと、黒い前髪のせいで目が隠れたおかっぱ頭の青年が、口端を上げて笑みを作っている。

ズボンのポケットに入れていた手を出し「ちやうちやう」と、弁解を始めた。

「昨日さ、俺何にもしんと帰ったやろ？　だから、今日こそは思うて、また来たんや」

「……お前、またどこから入った。テラスからは侵入したわけじゃないだろう」

「ほうへえ。お嬢ちゃん、問題です。俺はいつたいどこから侵入してきたでしょうか？」

制限時間は三十秒、と言われ、シャスティスは思わずあたふためいた。

「……………分からない」

それが、一秒後出した結果だ。

おかつば男は「正解は」とどこかの司会者きどりをする。

「堂々と玄関からの不法侵入でしたー」

「……………。警察ヤードを呼ぶから待ってろ」

「ちょよ、ちょっとちょつとちょつと！ 確かに不法侵入かもしれへんけど、れっきとした商売人やん？」

「よしシャスるー、一緒に警察署に行こう！」

「ああ」

しかも横から鳶色の髪と若干垂れ気味の瞳を持つ兄まで出てくるのだから、おかっぱ男は兄妹の腕を掴んで引き寄せた。

「ストップ！ 俺は薬を売りに来ただけなんやって」

「ええ！？ そうだったんだー。知らなかったねーシャスるー？」

「……兄様。さすがに言いすぎじゃないか？」

「大丈夫だよシャスるー。薬ならタダで買い占めたから」

「今度は兄様が警察に捕まれ！」
ヤード

思わず叫ぶと、兄は全くそんなこと気にせずに、机に置いたクッキーを一つまみ。

「ちょっと甘いかな」

「ほ、ほっとけ！」

口の中でクッキーを転ばす兄は、ふと不思議そうに問いかけてくる。

「これ、僕とシャスるー二人が食べるには、ちょっと多くない？」

「そ、それはだな。多めに作ってしまったんだ。しょうがないだろう」

「もしかして、シャスるー。こいつの分も作ったの？」

「人の話を聞けっ！ 私がいつこんなヤツのクッキーを作ったと言うんだ！」

「へっ？ 俺のために作ってくれたん？」

「ちがーっ！」

おかっぱ男は、まったくもって話をややこしくしてくれる。

「ああそつだ！ お前、薬売りに来たんだろう？ 仕事はしなくていいのか？」

「それならさつき済ました」

「早く言えよ！」

「気にしない気にしない」

シャステイスは思いつきり落胆した。

……こいつらのペースについていけない……。

「……ああそうだ。シャスるー、お外で厄介事でも拾ってきた？」

急に兄が言うので、シャステイスは「どういう意味だ？」と逆に問い返した。

すると兄は、どこか視線をさ迷わせながら言う。

「いやだって、さっき玄関の前に男共が群がってたんだけど……」

「それで？」

「僕が大男を剣で気絶させたら、一目散に逃げちゃった」

「ふうん」

「ヤダよねああいうの。面倒ってやつ」

「……。兄様、騎士団に入れば？」

「いやだね」

……こいつ……。

シャステイスは拳を握り、ほうと深呼吸を繰り返す。

危ない危ない。ムキになったら相手の思う壺だ。

「子爵家ちゅうもんでも、庶民と全然変わんないね」

……正論だ。

「まあ兄妹仲良いからどうでもいいけど、俺もう帰るわ。ベッタベタの甘々のシーンを見られるほど、俺の神経は太くないんでね」

「なっ！ それどついつい意味だ!？」

なんだか意味ありげに口角を吊り上げたあかつぱ男に、シャステイスは慌てて声を出す。

人がいなくなったら、こんなやつに何されるかわかったもんじゃない。
ない。

「行こうよ。部屋」

後ろで兄が舌を出して、なにやら官能的な声を出す。

普通の女の子なら悩殺だろうが、妹としてそれが許せない。

「て、テメエ、自分の妹に何をしようとしてんのじゃあああああ
あ！」

兄のみぞおちに、膝蹴りがクリティカルヒット！

「うー。僕エムじゃないのにー」

「エスとかエムとか、一般庶民の情報を取り入れすぎじゃあああああ
ああ！」

「楽しいでしょ？ 僕はドエスだよ」

「美形面ひいけいめんでどっかの女性さん方人気一球ストライクな発言をするな
あ！」

「よし」

兄は少し口角を上げると、悪戯めいた笑みを浮かべた。

柔らかい感触が、唇に伝わる。

「っぁ!？」

舐められる、という表現が一番正しいだろう。

バチバチと、刺激が体全体に広がった。

つづいて動いたのは、兄の大きな手。

ひよい、と、抱え上げられる。

兄にお姫様抱っことか……………。

「ちょ！ な、何をする！」

「あとちよつと……………」

ボソリと切なげにつぶやき、兄は儚く微笑した。

シャステイスの顔はすでに真っ赤だ。

「何でシャスるーは、女の子になれないの？」

座らせられたのは、兄のベットのよ。

真顔で、兄は問いかけてきた。

「シャスるーは可愛いから、女の子の方がいいよ」

「うるさい」と、反論しようとしたら、再び唇を塞がれ
あれ？

「もう！　せつかく良いシーンだったのに！　あの人もどこまで僕を追っかけてくるかなっ」

……　ってオイ！　それどどういう意味だ！

兄は機嫌を一気に悪くし、イライラとシャステイスの腕を掴んだ。

そのままどこかへ連れられ、来てみるとなぜか玄関だった。

そこに立っているのは緑色の髪をした、ボンキュボンの美女。

露出度の高い服と唇から出された官能的な声で、一般男子なら鼻血爆発だっただろう。

「ねえあんた、あたしとやり直さない？」

やり直す……？

シャステイスは不安げに兄を見上げた。

兄の顔には、先ほどとは違ってかわった険しい表情を浮かべている。

「妹の前で、変なこと言わないでくれるかな。やり直す？　ちょっと付き合ってたくらいで、いい気なもんだね」

冷徹で、突き放すような声音だ。

今まで見てきたニヤけた顔とは、違う。

「ああ。そういや、そこにいるのが妹さん？　ファム」

兄の本名は、ファムティス。

敬称ではなく愛称で呼ぶなんて、いったいどこで知り合ったのだろうか。

「へえ。可愛い子だね……………」

ひとしきり品定めしたような目つきで見ていた美女は、くいつと、谷間が見えるように上目遣いで兄に近づいた。

「確かに可愛いけど、まだあたしには敵わないね。あと数年経ったらウチに来て貰いたいよ。

つとそれより、あたしとやり直さないかい？ 悪くは無いやね、あたし」

「…………。何度も言うけど、関係を戻す気はないよ。僕は一途な男だからね」

兄は冴えた言葉で言う。すると美女は、あっけにとられたかのような顔をしたあと、あっははは、と豪快に笑い出した。

…………胸がすごい。

「それで一途な男かい…………っ？ 笑える話だよ。まあいいさ。あんなとの夜は一番楽しかったからね、まだ諦めないよ」

……兄様、お前まさか花町に……。

じとー、とした目で、シャステイスは兄を睨み上げる。

「えっと、可愛い妹さん、あたしはまだ諦めてないからね。うーん
っ！ほんと良い顔立ちしてるねえ。あと胸さえあれば完璧っ！」

指を鳴らした美女に、シャステイスは機嫌を悪くする。

確かに自分は、彼女のような谷間のある胸などないし、あのよう
な高い身長も無い。

「じゃあね、ファム」と、さりげない言葉で、美女は踵を返した。

まさか、この屋敷まで、あの格好で一人で来たのか？ あの人。

2：クッキーの香りとともに（後書き）

暇つぶし作品なのに、なぜかプロットが出来そうな予感……。

3：夜会は危険がいっぱい 一日目っ！

いったいどういうことか、と、シャステイスは思う。

なぜか自分は、どこかのお人形さんのように遊ばれていた。そう、それもただの着せ替え人形ではない。

化粧と髪と肌まで、何から何まで遊ばれているのだ。

……… ちょい待て。まさか、こんな格好で人様の前に出て行けと？

冗談じゃない。足の爪先から頭まで磨き上げられ、ドレスは神秘的な黒のゴシック、イコールゴスロリで着飾り、いつもツインテールで終わっている自慢の銀髪は、くるくるとカールを描いてお嬢様風に仕上げられている。服と合った大きな宝石を見て、シャステイスは一瞬「持って帰ってもいいか」と泥棒さながらのことを思ったくらいだ。

「綺麗ですわねシャステイス様」

「本当ですわ。もっと女の子らしく着飾れば、絶対おモテになりますわね」

使用人のくすくす声は、シャステイスの顔をさらに紅潮させる魔

のささやきだ。

「に、兄様——っ！」

それは、いまから約四時間前のことであつた。

シャステイスはいつも通りティータイムを楽しんでいると、いきなり兄が抱きついてきて。

『招待状！ 夜会にゲストとして僕たち一緒に行けるよ！』 ↑——この発言が原因だ。

社交辞令は嫌いなのに、兄は私を無理やり——それも誘拐のようなかたちでこの会場に連れて来たのだ。

「——呼んだ？」

シャステイスは危うくドレス姿で床にダイブしそうだった。何とか足で踏ん張り、呼んだ？と可愛い声でこっちを見下ろす兄を睨みつける。

「ここ試着室！ 男子禁制！」

「えっ？ だつてシヤスるーが呼んだんだよ？ 兄様——
——っ！」って」

「呼んだんじゃない叫んだんだ！ それに、だからってここまで入ってくるか普通！？」

使用人たちが申し訳無さそうに頭を下げた。それを見ていると、兄が言い訳を始める。

「妹が僕の名前を叫んでるんだよ？ これは妹の貞操の危機だと思つて駆けつけてそうではなかったとほつとする兄の勇姿を褒めてほしいくらいだよ」

「言い訳が長いわ！」

ポコつと可愛い音を立てて兄の頭蓋骨がへこんだ。兄が涙目になつて頭を押さえている。その姿はあまりにも滑稽で、ある意味自分より可愛く思えた。

「痛いよおシヤスるう。慰めてー」

「かわいい子ぶるなっ！」

ポコつというのが比喩なのかどうかは自分自身もわからない。そんなことより、シヤステイスの怒りは目覚ましいものだ。

「——はやく夜会へ行くよ。シャスるーが僕のものだって知らしめるためにね」

「お、お前なあ……！」

シャステイスは足を地面で踏ん張って息を吸い込み、思いっきり吐き出した。

「このド変態のアホ馬鹿兄様————っ！」

なお、後の使用人の証言では、この声は会場中に響き渡るほどすごかったらしい。

▼
▼
▼

紳士的に着飾る男達と、上品に笑む奥様やお嬢様。公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵という爵位関係なくこの会場に招待されている。夜会といっても舞踏会というわけではなく、単にお酒を飲み合っ互いを認め合う連合だそうだ。ここで婚約の話が持ち上がることも少なくない。

「お嬢様。最高級シルブレックの赤ワインがいかがですか？ ほんのり甘く口当たりがよろしいですよ」

さきほどからいったい何回こうやって声をかけられたらろうか。お酒が飲めないからと断っているのに、いまだお酒を勧めてくる人が多い。兄が伯爵夫妻のご挨拶に行っているから余計か。

……疲れる。…早く外の空気を吸いたいな。

どういうわけか、兄が一向に帰ってこない。はてさてどうしたものやら。妹に心配させてどうするのだ。

……まさか、どこかで変な人たちに囲まれて……。

——シヤステイスの脳内再生——

兄は走る走る走る走る。そのうち壁に行く手を阻まれ、追ってきた性悪どもをにらみつけ「くそう」とつぶやく。

おい、さっさと出いな！ さもなければ、会場のなかに例のブツ

を紛れ込まずぞ！

性悪男の威嚇。

会場には、たくさんの人の命が！ そのかわり、僕を殺してください！

兄様の叫び。

あ？ んだとテメエ。テメエ、まさか例のやつを処分した、とでも言っんじゃないよな！？

性悪男、一歩進み出る。

え、ええ！ 処分した！ あんなもの、僕がこの手で！ だから、殺すんだったらこの僕だけで！

胸倉をつかまれ持ち上げられる兄様。

て、テメエ！

性悪男は怒りのあまり、兄様を地面に叩きつけた。

—— つづく…… ——

シャスティスは顔を蒼白して辺りを見渡した。

……あの変態が謎の組織に追われてる身なんて、今のいままで気付かなかった！

——シャステイス、君は馬鹿だ ↑ ナレーション（作者）

「と、とりあえず、この会場で兄様を探そう！」

——本当に探しちゃうの？ だいたい、あなたの兄貴が「僕が変わりに死にます」的な発言を本当に言うと思って……——って、もうすでに早送りのスピードで会場中を走り回ってるし……

「い、いないっ！ 本当に、どこにも、いないぞ！」

——いやいやですからね、あなたの兄は……

……うるさいぞ！ 1話と2話は影すら見せなかった分際で、よくもまあ抜けぬけと！

——……（作者撃沈）

シャステイスは気を改め、もう一度兄がどこにいるか推理してみた。

——シャスティスの脳内再生パート2——

兄様は地面に叩きつけられてもめげない。

くっ！ たとえ僕が死んでも、会場にいるみなさんと命だけは——

——はいはい長くなりそうなのでシャスティスの脳内再生はここで強制終了。閉店ガラガラーっ

——END——

「兄様の懸命な顔しか出てこなくて兄様の位置がわからないな……」

どうせなら、兄の居場所がわからない。

——ほーら言ったとおり。やっぱり読者様に脳内再生を省いて正解でしたね。

「うー。反論する言葉もない……」

シャスティスはがつくりと肩を落とした。

それからとぼとぼと歩き出し、ふとここが部屋の端っこであることに気付く。

窓から大きなテラスに出て夜風に吹かれてみると、なんだか急に目頭が熱くなってきた。

ぼろぼろと涙が出てくる。

「あ、兄様——っ！」

叫んでも、返事は——

「——なに？」

「ぶっ！?!?!？」

返事は——返ってきた。

兄は会場からテラスへ出て、シャスティスに近寄る。すっきり爽快な顔をしていたのに気づいたのは、もうちよつと後からだ。

「あれ？ まさかシャスるー、泣いてる？」

「！ こ、これは、……め、目にゴミが入っただけだっ」

自分の顔が真っ赤なのが妙に腹立たしい。兄のやわらかな微笑が目に入り、さらに真っ赤になるのも苛々する。

「そ、そんなことより、兄様は、ど、どこ行ってたんだっ」

「え？ どこって、酔いがきたから外に出てくるって、さっき言っ
たよ？」

「あ」

兄の言葉に、シャステイスはぽかんと口を開け、いつもは鈍い頭をフルスピードで回転させる。

確か兄がお酒を飲んで、そのあと。

『シャスるーごめんね。ちょっと酔っちゃったみたいだよ。ちょっと外に出てくるね』と。

——だから言おうとしたのに、シャステイスったら……。

シャステイスは、自分が流している涙と、自分の馬鹿さ加減にし

びれを切らし。

「——うおおおおおおおりゃあああああああああ」

奇妙な叫び声を上げて会場の中に入り、その辺にあるお酒を片っ端から飲みあさっていった。

「しゃ、シヤスるー！？ それ、超アルコールの高いお酒だよ！？ そんなもの、そんな飲んじゃ……！」

そのあとの記憶が無かったのは、これまたシヤステイスのせいではない。

3：夜会は危険がいっぱい 一目っ！（後書き）

勢いで書くって大変ですね。わたしの辞書に入れとかないと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3975x/>

キイトン国の、とある物語

2011年11月16日10時10分発行